

日本歌唱芸術協会

本部：沖縄



会 報 第八号

※これまでの全会報を本協会ホームページで公開しております。 <https://www.jsaa-okinawa.org/>

- ドイツ留学～子育てと学業～Ⅱ-----仲村渠 悠子 pp. 1-4
- 高校生教育プログラムの指導に携わって～歌う喜びに会うために-Ⅰ
服部 洋一 pp. 5-8
- わたしの発声法ノートⅢ-勝手にコレペティ-----糸数 剛 pp. 9-13
- 歌の原点を想って～琉大ミュージカルとパフォ-----花燈 明佳 pp. 14-16
- 中田喜直生誕100年コンサートを終えて-----仲村渠 悠子 pp. 17-18
- 歌う思い出Ⅰ～恩師たちとの出会い～スペインからフランス～
福田 美樹子 pp. 19-21
- 最近感じていること-----中川 麗子 pp. 22-23
- 2つの音楽体験 ①作曲の動機としてのヴィーナスの冷静な眼差し
②声楽の発声調整アリア-----豊田 喜代美 pp. 24-27
- 執筆者略歴-----p. 27

2024年3月

日歌唱芸術協会（本部：沖縄）

■ドイツ留学 ～子育てと学業～Ⅱ

仲村 渠 悠子 なかんだかり ゆうこ

早いもので年が明けて 2024 年、留学中に生まれた娘も今年 19 歳になりました。こうして振りかえり書かせて頂くおかげで、子供たちとドイツ時代を思い出し懐かしく語り合えることが嬉しいです。

今回は、家族で臨んだピアノコンクールの思い出を書かせていただきたいと思います。

2006 年夏、長女 1 歳 7 か月、長男はまだお腹の中で 7 か月目に入っていた頃でしょうか、ギリシャのクレタ島で開催されるザイラーピアノ国際コンクールに挑戦することにしました。以前の会報（第 5 号）でも触れたとおり、ドイツに来てからことごとくコンクールに惨敗しており、二人目をお腹に宿してからはもう国際コンクールに挑戦することは無理だと半ば諦めかけていました。コンクールを受けるには練習時間の確保以外に旅するお金も必要です。これまで受けたコンクールには、娘を連れて行ったものもありますし、主人に託して一人で旅したものもありますが、ホテルに滞在したりベビーシッターをお願いしたりそれなりに費用がかかります。デトモルト音大で学業と並行して Korrepetition（伴奏員）のお仕事をさせていただけしたのは、とてもありがたい事でした。

課題曲を確認し、今あるレパートリーでなんとか参加できそうなのが、唯一このクレタ島のコンクールでした。卒業試験のために準備したレパートリーも活かそうだったのでこのタイミングで挑戦するのがちょうど良いと判断し、真夏のクレタ島へ家族旅行も兼ねて出発しました。滞在先のホテルは思いのほか会場から遠く、バスを利用しなければならなかったのですがバス乗り場の時刻表はほとんど読めないほど剥げていて、ホテルの人に聞いても、時刻表はあってないようなものだからと、結局バスが来るまで待つばかりでした。

練習もろくにできないまま一次予選を迎え、もの

すごく緊張しましたが、ミスも少なくショパンのエチュードは今までで一番良く弾けたような気がしました。演奏後お腹を空かせた娘と主人が会場出口で待っているのを見て、一揆に緊張の糸がほぐれたのを感じています。

翌日、練習室に空きがなく娘も退屈していたので、海に泳ぎに行くことにしました。結果発表の夕方までは充分時間があったので、観光も兼ねて少しのんびり過ごすことにしました。しかしここで予想だにしないことが起こります。海からあがり会場に行くと一次予選通過の嬉しい報告を受けるのですが、明日行われるはずの二次予選が、今日これから二時間後に行われるというのです。喜ぶのもつかの間、楽譜もドレスも持ってきこらず、今日一日ピアノも弾けていないので大パニックです。ひとまず海水で濡れた髪を乾かすためのドライヤーとドレス、楽譜を持ってくるよう主人に頼み、練習室に向かいました。

やり取りを英語でしたのかドイツ語でしたのか覚えていませんが、いずれにせよ私の語学力ではどうすることも出来ず、二時間後には演奏するという事実を受け入れるしかありませんでした。土地勘もない異国の地で、娘と二人決死の覚悟でホテルに向かう主人の後ろ姿の頼もしかったこと、今も鮮明に思い出されます。そして、このハプニングのおかげか、二次予選は自分でも驚くほど集中して演奏することができました。コンクールの合間に泳ぎに行ったことを後悔しましたが、今思えば海水の水に浸かりしばしコンクールを忘れ、心身共にリラックスしたことが、良い演奏につながったのではないかと思います。

奇跡的にも二次予選に通過しファイナリスト 6 名（7 名だったか記憶が曖昧）に選ばれました。夢のオーケストラとの共演です。日本人では私の他にテレビなどで活躍中の清塚信也さんがファイナリストに選ばれていました。

翌朝、いつも声をかけてくれるホテルの支配人（ドイツ語ができる）にファイナル進出の報告と、練習室がなくて困っていることを話すと、支配人

の自宅にあるアップライトピアノを使わせていただけることになりました。可愛らしい支配人の娘さんが案内してくれて、石畳の響きの良い応接間にあるピアノを、思う存分弾かせていただけたのは感謝してもきれないほど、ありがたい事でした。

書きながら思い出しましたが、そのホテルには毎晩顔を合わせるようになったおばあさんがいて、サンセットの海を見ながらワインを飲み、主人とはすっかり煙草友達になっていました。日中のハプニング話や、練習室が見つかった話など、身振り手振りで話すのが楽しく、娘にはいつも甘いものを用意してくれていました。そのおばあさんは、ご主人様と毎年このホテルにバカンスに来ていたようで、ご主人様が亡くなられてからも毎年ここに一人で来ているとのことでした。ファイナル進出を抱き合って喜んでくれた一期一会の友人、旅先ならではの素敵な思い出が蘇ります。

ファイナルの会場は野外劇場でしたが、観光名所でのコンサートということで、滞在中のホテルでもコンクールのファイナルを楽しみに来ている人がいるようでした。このホテルに滞在しているアジア人は私たちだけだったのですが、ファイナル進出が決まってから、何人かの人に声をかけてもらうようになりまして。アジア人の子供を初めてみたとき喜ぶ方もいましたし、お腹の大きなアジア人女性がピアノコンクールを受けに来ているというのを不思議そうに見ているようでもありました。「幸運を祈ってるわ。」「頑張ってるね、神のご加護を。」など、あたたかい言葉を頂き、気分はファイナルに向けて高まっていきました。

ファイナル当日、天候にも恵まれ満点の星空の下、いよいよオーケストラ（記憶が曖昧ですが、ブルガリアのオーケストラでした。）との共演です。会場となる野外ステージは石畳の坂道を登り切った高台にあり、会場に着くまでかなり息切れしたのを覚えています。曲目は前年に主人の指揮でデトモルト音大のオーケストラと演奏させて頂いたリストピアノの協奏曲第一番でした。大き

なお腹はドレスを着ても隠しきれないほどになっていたのも、会場からの拍手がどうぞ冷やかしの拍手になりませんようにと祈りながら、とにかく最善を尽くすのだと深呼吸を何度もして舞台上に上がりました。指の独立が悪く、思うように弾けないパッセージを乗り切り、最後のクライマックスまで落ち着いて弾くことができました。今の自分にできる最高の演奏だったと思います。これは後にも先にも一度きりなのですが、感激のあまり、天を仰いで感謝の気持ちを満点の星空に伝えていました。ひんやりした澄んだ空気の美味しかったこと、本当に美しい夜空でした。

演奏にも満足し、感謝に満ちた夜から一日あけ、ついに結果発表です。自己最高の演奏をしたと思っていた私は上位入賞を期待していました。しかし、そんな都合の良いことはなく結果は上位入賞ならず **Diploma** 賞でした。がっくりと力が抜け、レセプションに出る気力もありませんでしたが、ここで悪態をつくわけにもいかず審査委員の先生方の意見を聞き、他の参加者とも交流を図ることにしました。審査員のフランス人の先生は私を見るなり「**You are crazy**」と言って（勿論、私の大きなお腹のことをさしてのこと）名刺を下さいました。フランスにきたらレッスンして下さいとのこと、ありがたいお言葉でした。

他の先生方とのお話は、私の語学力のせいもあって当たり障りのない会話にとどまり、これといって記憶に残っていないのですが、唯一日本からいらしていた審査員の山岡優子先生からのお言葉だけは、今ものなお忘れることができない深いメッセージでした。助言を求める私に山岡先生は「あなたがなぜ、ファイナルに残れたかわかる？ それは、あなたの人生が演奏に表れていたからよ。舞台に出るときはね、武器を持っていくのよ。あなたは世界で唯一の存在、他の誰もあなたにはなれないの。世界中の誰にもこれだけは負けない、これが私の武器だというものを持って舞台上がりなさい。」いつしか、日本人の参加者たちが集まり、耳を傾けていました。山岡先生はみんなに向けて、日本人である私たちが世界に出ていく時、

自分の強味、武器をしっかり持つように、自分は唯一無二の存在であることを決して忘れてはならない、と力強くおっしゃいました。足が悪くなっており、片足を引きずりながら審査をなさっていた先生でしたが、それから2年後にお亡くなりになったと知り、あの時私たちに訴えるように力強く語られた言葉は若い日本のピアニストたちへ向けた遺言のようなものだったと感じずにはいられませんでした。あの時は、緊張して気付きませんでした。山岡先生は中学の時の恩師日比谷友妃子先生の先生でいらしたので、私は孫弟子になるのかとまた感慨深く、クレタ島でお話できたご縁に感謝致しました。

表彰式では三位に入賞した清塚信也さんが、白いシルクハットを片手に壇上に登場し、会場を盛り上げていました。日本人でありながら、現地の人たちとも臆せずコミュニケーションをとり、相手を常に気遣う姿勢にまた感心しました。今やドラマや映画にも出演し、作曲も手がける清塚さんは、桐朋学園時代から頭角を現していましたが、常に相手のことを考え、場の雰囲気華やかにされる才能をあの頃から自分の武器として、しっかり意識しておられたのかもしれませんが。コンクールの結果に不機嫌になる私とは違い、表彰式という会のクライマックスを、聞きにきてくださるお客様や、審査員はじめ関わって下さった方々への感謝をジェスチャーや笑顔で伝える様子を見て、自分が恥ずかしくなったほどです。

山岡先生にしろ、清塚信也さんにしろ、人々を魅了し先頭きって行く人というのは、ものの見方が大きく、まさに器が大きいとはこういうことかと思わされるのでした。コンクールを受け続けていると人生の目的がコンクールの入賞であるかのように視野が狭くなりがちですが、見方を変えれば惨敗したどのコンクールからも、学ぶことができチャンスを得ることはできたはず。予選落ちのレッテルを自分に貼り付け、落ち込んでいた私は随分な損をしたなあと反省するばかりです。

「あなたは世界中にたったひとりしかいない」世界中にたった一人しかいない私が、無数の世界中にたった一人しかいない人に向けて演奏させていただけること、それは喜びでしかないとあらためて感慨深いです。音楽的に恵まれた環境の人もそうでない人も、コンクールに入賞すれば宝くじに当たったように、大きなチャンスを得ることができます。そのための代償があったとしても多くの音楽家が憧れるコンクールの魅力、過ぎ去った良い思い出としてこのコンクールを思い返せるのはありがたいことです。

今や、自分の生徒たちが日々コンクールに挑戦していて、応援する側に回りました。舞台に立つ前の生徒には、あなたは世界にたった一人しかなくて、きらめくその瞬間のために全力で挑んだ日々が報われる日であること、その瞬間を小さな心配事で味わえないのは勿体ないと伝えるようにしています。もちろん一番難しいことですが、緊張や心配事の裏には自分を必要以上に良く見せようとしたり、練習不足からの罪悪感や過去のネガティブな記憶等々、思い込みからくることがほとんどだと思います。今も舞台裏で緊張に震えどうすることも出来ないときは、コンクール直前に頭まですっぱり海水に浸かって遊んでいたあの爽快感を思い出し、一期一会のこの瞬間に居合わせて下さる方々に思いを馳せます。そして、人生であと何回こんな体験をさせていただけるのだろうか、と思うと緊張に震えるこの瞬間も愛おしくなるものです。

その後、真夏のクレタ島からドイツに戻り11月に長男を無事出産しました。お腹の中で嫌というほどピアノを聞いているから音楽に興味を示すだろうと思いましたが、数年だけチェロを習い、僕はサッカー選手になるのだと今は一人神戸に移り寮生活をしています。

昨年パレット市民劇場で開かせていただいた「ショパン全曲演奏会 Vol.2」の直前、私は自分のことで手いっぱいでしたが、リュックサッカーついで「忙しいと思うから、コンサート終わったら

必要なもの送ってね。」と勢いよく旅立っていき
ました。サッカーのルールもわからない私からサ
ッカー選手など生まれるわけもないのですが、好
きだという一心で夢に向かって駆け抜ける姿は
気持ち良いものです。沢山のことを経験して、後
悔のない人生を歩んでほしいと思っています。

沖縄に戻り8年が過ぎました。髪を振り乱し頑
張っていた頃が懐かしく、今も相変わらず突っ走
っている感じはありますが、芸術は長く人生は短
し、です。音楽を愛する皆様と共に歩める時間も
また一つ一つが宝物のようなもので、本協会に関
わらせていただくご縁に心から感謝しておりま
す。長文になりましたが、今年も何卒宜しくお願
い申し上げます。

1) 自宅練習室でおもちゃのバイオリンで遊ぶ娘と息子
クレタ島から無事戻り2006年11月長男出産。大音量
のピアノの側でもすやすや眠るほんわかした性格だった息子
も今やストイックなサッカー青年です。娘はバイオリン型のモ
ーツァルトチョコレートの空き箱で遊ぶのが好きでした。



2) 自宅練習室でおもちゃのバイオリンで遊ぶ長女と筆者
練習する私の気を引こうとあの手この手で近づいてくる子供
たち、娘はおもちゃのバイオリンで私に合わせを申し出ます。



3) ポンのベートーベンハウス前にて家族写真
家族でポンのベートーベンハウスを訪れた時の写真。走り回
わる子供たちを制すのに必死で、何を見たか思い出せま
せん。もう一度訪ねてみたいです。
左から長女、筆者、長男、主人(指揮者:チョウ ジャンフン)



■高校生教育プログラムの指導に携わって～歌う喜びに出会うために-I

服部 洋一 はっとり よういち

2024年1月、3回にわたって取り組んだ東京都教育委員会主催の教育プロジェクト『得意な才能を伸ばすプログラム(芸術)』に、筆者は、声楽分野の講師(講義及び実技)をつとめた。

このプロジェクト期間中(2023年10月～2024年1月)筆者は、正月明け第1、第2日曜日にそれぞれ午前午後合わせて6時間ずつ、計12時間の講習(講義とレッスン)を行った。また第3日曜日は、他の分野にて学んできた高校生たちとその指導者(東京藝大、東京音大教員)及び主催者・運営スタッフが一堂に会して、東京音楽大学中目黒代官山校舎特大教室(オーケストラ練習にも使用されるスペース)で2時間半にわたって「成果発表会」が行なわれた。

東京都教育委員会としては初めての試みとのことで、芸術分野から今回は、鑄金/染織/ミュージック・ビジネス・テクノロジー(MBT)/声楽の4分野が設けられ、都立高等学校に通う高校1年生たちが、それぞれの興味ある分野に分かれて進められてきた。早くから取り組んだグループは、2023年の10月に開始した講習もあり、「鑄金分野」のグループは、秋を迎えた東京藝大の美校キャンパスで、受講生たちが自由に見つけた素材(落ち葉、虫など)をモチーフにそれを工房に持ち寄り、鑄金細工に仕上げたプログラム、また「染織分野」では、晩秋からクリスマスを迎える時季に、生徒それぞれが思い思いの色に毛糸を染め上げ、これを用いて各自がタペストリーやマフラーを編むといったプログラムもあった。また、来年度より新たに東京音大に設置されるMBTのグループでは、生徒各自が録音した生活音や打楽器音を用いこれらを音響機器をもちいて変形・変容させながら一連の音芸術作品を作るという作業に取り組んでいた。

それぞれの講習のテーマと概要及び講師陣は、本シリーズⅡでご紹介することにする。

さて、その中で筆者は、何かの造形物を作るのではなく、声楽分野として、身体そして声という楽器を見つめて、生徒自身が持って生まれた声を磨く方法、そして、それを駆使して歌を歌い、心を、そして思いを伝えるにはどうしたらよいのかについて、実技指導を通して体験学習してもらう形式を取った。

今回は東京音楽大学声楽部会教授の中で、この新たな取り組みに誰を推挙するかが最初に問題となったが、都立高校出身者でもある筆者に、今回のプロジェクト「声楽」の講師・実技指導者としての白羽の矢が立ったというわけである。今年度から2年連続で本学声楽部会主任を任されているので、ただでさえ多忙の折に、正直、対応出来るかどうかとは思ったが、筆者は、都立立川高校の卒業生でもあり、まさに高校2年の夏休みに、マリオ・デル・モナコが歌う歌劇「道化師」のカニオのアリア<衣装をつけろ>を聞いて一念発起し「この俺も声楽家になるぞ!テノール歌手になるぞ!」と、電光石火の勢いで決めた人間でもあったので、このプロジェクトに集まってくる都立高校生たちに自分の経験を通して、将来の自分の人生の方向性を決めていくための何かを投げかけられるのではないかと思い、講師になることを決めたのだった。

講習を受け持つのには、時間的な余裕はあったが、まだどんな受講生が集まるのかも分からないうちに、このプロジェクトへ向けて講師は講義要旨を提出しなければならず、成果発表(実演)のことも射程にいられて、ピアノ伴奏には日頃から大学院「スペイン歌曲」の授業で伴奏を務めてくださっている吉本悟子先生にお願いし、次のようなメニュー立てとした。

資料1：才能を伸ばす教育プログラム「声楽」要旨

《高校生のための呼吸法・発声法／芸術的歌唱法》

2024年1月7日&14日

声楽指導：服部洋一（東京音楽大学教授）

ピアノ伴奏：吉本悟子（ピアノ部会伴奏所属非常勤講師）

【日本人の身体的特性に基づくベル・カント唱法教授法および学習法】

～独唱・重唱・合唱の初歩的段階における重要項目～

<導入編>

1. 講師自己紹介 都立高校出身者が何故声楽を志し、どうやって声楽を続けてきたか？
2. 受講生自己紹介 好きなこと、所属の部活？と音楽経験そして、将来の夢など

<実技編>

1. 身体の柔軟性～準備体操（末端から中心へと進むこと、軟口蓋のフレキシビリティ等。）
2. 姿勢（「腰幅平行立ち」とその意義）
3. 呼吸法（呼吸活点を中心とした吸気、ブレスの3つの型/注1として6頁に説明記載）
4. 前後立ちと重心の置き場所～上虚下実
5. 息をエネルギーとする声を息のボールが支える!!
6. 「喋りのポジション」「響きのポジション」
7. レガートによるヴォカリーズ～3度、4度(2種)、5度、6度、7度音程による発声練習
8. 五母音の質の均一化と「磨かれた母音」「品格と知性を感じさせる母音処理」について
9. アタックの重要性：「息～声」の順、そして「イメージ～息～声の順」
10. ヴォカリーズ唱における留意点
(旋律に内在するエネルギーに沿った母音唱～どのようにして声のポジションを一定に保つか)
11. まず頭声を覚え、その後に胸声を学ぶこと
12. 簡単な曲の旋律を用いた「歌曲の練習方法」～まずは[ɔ]で歌い「メロディーマップ」を明らかにする。
13. 全ての音節の母音だけを繋いで歌う。閉口母音[i][u]から開講母音[a][ɔ][ɛ]に移る時の留意点
14. 子音の処理と母音音質の維持
15. 初級の目指すゴールは？
16. 学習途上における学習者の心理(指導者側の着眼点を

踏まえながら)

<初級編 II> (前回の復習もかねて)

1. 口腔内の息のボール～「欠伸」の効用
2. 副鼻腔の解放と深いブレス～マスクラの準備
3. 骨盤底から頬骨までの直径を持つ空気のボール～息を息が支える
4. <U>母音の効用～アタックの潔さ
5. 息の流れがあること～絶え間なく途切れず、滑るように流れる息を意識する
6. ウォーミング・アップはあくまでウォーミング・アップであること
7. <U → 0 >
8. 息の量とスピードを徐々に増やして上行し、最高音のポジションを忘れないようにしながら下行する～自然なcresc. e dim. となる→カンタービレとは何か
9. 息の支えとは一アッポジジョとソステヌートのバランス
10. 声の焦点 (フォクス・ヴォカール)

<歌唱への応用>

1. まず<0 >でさらう
2. テキストの各シラブルの母音を抽出して歌う
3. 子音をつけてテキストで歌う～どの母音にも<0 >の母音があるように歌う
4. 発声で学んだことが旋律唱に活かされること
5. フレージングの三様態 (うねり、ねばり、たたみこみ)
6. 音の「後処理」のパターンについて
7. 合唱における音量設定
8. 美しいハーモニーのための4つの要素

<試演会へ向けて>

1. 演奏者としてのマナー
2. 表現力(発信する力、届ける力)のある演奏を目指して「対告衆」の設定～一人に伝えると全体に伝わる

今年度から初の試みということもあるせいか、「声楽分野」の受講生は高1女子が3名と少数ではあったが、歌うことに対してとても興味津々という生徒たちが集まり、初日はまずは、集まった受講生自己紹介からに続き、講師（ピアニスト、筆者の順）自己紹介から始めた。先に触れたが、

都立高校(しかも美術クラス!)の筆者が、何故に声楽家を志すようになったか、しかもどうして最初に青山学院大学英米文学科に4年間通い、ジュゼッペ・ヴェルディの心酔するウィリアム・シェークスピアの戯曲研究に没頭したか、また、第2、第3外国語としてスペイン語、フランス語を学習し、ラテン語や古典ギリシャ語まで何故学んだかを語り、しかも英文学者とはならず、その卒業の年に東京藝術大学へどうやって進んだのか、そして、学部卒業の後、修士課程に3年間、博士後期課程に7年間、計18年間ものあいだ学生生活を送ったのはなぜかを語った。これらの詳しい内容は、またいずれ回顧録的に当会報にて書き記そうとおもう。

さて肝心の実技レッスンであるが、資料1のメニューのうち、1~5は姿勢と呼吸法にあたるものである。特に「縮み志向」のある身体を持つ日本人の場合、股関節と腰を解放するために、足の親指のつけねの骨(種子骨)に重心を置き腰幅平行立ち~腰(呼吸活点)にブレスを吸う3つの型を教え、(注1)タイミング的にブレスに余裕があるときに利用するIの型、瞬間的に深いブレスを吸うためのIIIの型(その架け橋となるIIの型)を体験してもらった。

「呼吸活点」や「下丹田」などと言った東洋医学的な、所謂「ツボ」についてキーワードは、高校生にとっては、かなり印象に残ったとみえて、最終成果発表の生徒たちによる感想では、「呼吸するツボが実は腰にあるのだということを初めて学びました!」と発言も見られた。また同じ生徒は、「良い響きの声が出るコツを皆さんにお伝えします。これも今回の講習会で身につけたのですが、皆さん欠伸(あくび)をして下さい!」と言って、軟口蓋のフレキシビリティを得させるための大きな欠伸~欠伸の噛み殺しについての効果をよく理解してくれていた。専門知識のほとんどない人たちにある技術の極意をつかませようとすときに卑近な例を引いてくると理解が得やすいという教育の基本方法が功を奏しているなと感ずるところがあった。

実技編 No.6 からは発声に入るわけだが、まずは、アウレリアーノ・ペルティレ(1885-1952)の⁷に⁷従って、*parlare* のポジション(喋りの位置)に、を置くことを体得させるための、口腔内を縦空きにして自分の口先1m前方でハミングを行なうことから始め(これは、声の暖気運転としてのウォーミングアップも兼ねているのだが、決して「こもり声」になっては意味がないので注意)、C₁のロングトーンから長3度スケールで、C-dur からF-dur までいき、F₁音が*parlare* のポジションにあることを確かめた後F-E-D-Cと降りて、そこでCのロングトーンから開口→[mamamama:]/[momomomo:]/[mu:]と行い、最後の[u](日本語のウではなくもっと深く丸い母音)母音を崩さずに長三度スケールで半音ずつ登っていくと言う手順を取る。

[u]のままG-durまで行き、次にAs-durになるとき、第3音のC₂を[o](開口音のo)に変え[o]のまま降りる、即ち[u-u-o-o-o:]と移行する。このとき気をつけなければならないのは、あくまで「欠伸」で得た、あの縦長の口形であることを指摘することである。

ハミングで始め、丸く品格のある母音唱法を体得させるために[u][o]を用いて誘導していくと、ともすると日本人の場合(特に就学児童・生徒の場合)一種の「こもり声、含み声」に陥ってしまうことがある。初心者が陥りやすい「自分の声をモニターしながら歌う悪い癖」である。これを一気に払拭するためには、筆者は発声の実技講習会で「河の向こう岸にいる友達を『オ〜〜〜イ!』と呼んでみよう」という、イメージを使った方法で教えることが多い。所謂「頭声は出るようになったが弱声で終わっている」ディレンマを克服する方法である。As-durの第3音C²を与えて、まずは講師が実演、その次に一人の生徒が、即、これの「まね」をする。生徒たちは、多少の恥じらいもあり遠慮がちにやる生徒もいたので、ここは講師がガンガン役者魂を発揮して生徒たちを誘導していった。さて、ここで喉声に戻ってしまっはいけないし、相変わらずのヒナヒナ声でもダメな

ので、ここは演劇の訓練のように生徒たちに女優になって映画の1シーンを撮られているかのようにやってみてと、その気にさせる誘導が大切である。このやり方で、遠くに声を走らせるという感覚が生徒たちなりにつかめたら、長3度のスケールを更に上行を続け、C²を開始音とするC-durまでいき、徐々に半音ずつスケールを下げていく。

この時に歌というものは、上昇音型よりも実はこの時、下降音型の方が安定させるのに難しさがあるのだ、と言うことを教え、「万有引力の法則」は音にまで強く影響を及ぼすという話を投げかけるのである。生徒たちは「歌を教わるって何ていろんなことをさせられるんだろう!!」と途中クスクス笑いながらも、益々興味に駆られて乗ってくるのがみえたのだった。

音にも万有引力が!!—これについては本シリーズIIで触れよう。

得意な才能を伸ばす教育プログラム（芸術：東京都教育委員会）

最終日成果発表会での重唱の披露風景 受講の高校生たちと右端の筆者（服部洋一）



■ わたしの発声法ノートⅢ

ー 勝手にコレペティ ー

糸数 剛 いとかず つよし

音大卒ではないが声楽が好き。下手の横好きで、高校時代から自己流で歌に親しんできた。それで、専門家ではないがキャリアは長い。そこで、自分なりに声楽作品についてここの部分はこう歌う方がよいのではないかという見解をいくつか持つようになった。

そのいくつかをここで述べたい。

その前に、エピソードを一つ。

2012年3月、喜納建仁さんが主宰する「森の音楽館」でボエームのワークショップがあった。指揮者の金子誠さんと演出家の岩田達宗さんによるワークショップだった。演出家の岩田さんは、さすが演出家らしく表情豊かでユニークな方でリアクションが派手な方である。ワークショップの途中で、岩田さんがボエームのスコアのある一つの音符に注目し、新しい発見があったらしく、それに気づいたことを飛び上がらんほどに狂喜していた。わたしはそれを見て、なるほど、小説でも読めば読むほど新しい発見があるというが、音楽でもそうなのだ。そしてディテールでも新しい発見というのはそんなにも嬉しく貴重なものだというのを、岩田さんの姿勢からわたしも感動とともに新発見したのだった。

ということで、わたしも、声楽曲の歌い方について、意外と見落としがちな点を発見したことをピックアップしてみたい。

○「初恋」（石川啄木作詞・越谷達之助作曲）の前奏と間奏にある四分休符について。（楽譜1）

「初恋」の前奏は5拍子の3小節と4拍子の2小節になっている。ピアノ伴奏は4拍子2小節目の二分音符、すなわち2拍で終わっている。その小節の4拍目から歌が入る。ということは、歌が入る前に一拍の休みがある。その一拍休みを無視して歌う歌手が多い。間奏にも同じ休符がある。わたしは、この一拍休みに意味を込めたい。つま

り、初恋について述べる前に、初恋を思い出す、つまり偲ぶための間（ま）だと捉えたい。

○「この道」の前奏4小節目の八分休符。この間が大事だと思う。pから半拍休みで、気持ちを入れ替えて次のf・アクセント・グリッサンドに行く。（楽譜2）

○「さびしいカシの木」（やなせたかし作詞・木下牧子作曲）の1番・2番・3番の歌の最後の部分の八分休符の歌い方について。「きえてしまった」の「っ」の部分は八分休符になっている。これは、「っ」の部分は促音として、休符として「きえてしまっ たー」と歌うほうがよいのではないか。ここに作曲家の意図があると思う。かわいらしさというか、立ち止まるというか、語りかける効果があるのでは。それなのに「きえてしまっ たー」と、休符を無視して歌う方が多いように思える。

池辺晋一郎先生は沖縄のことを大事に思われているようで、沖縄を題材にした合唱曲も多い。池辺先生の指揮で何度も歌ったことがある。池辺先生の合唱曲にも促音を休符で表した部分があり、先生の指揮で促音で歌うように指示された。その経験から、池辺先生ならば、この「さびしいカシの木」の八分休符はきっと促音として歌わせると思う。

なお、本協会主催の木下牧子先生をお迎えしての「研修演奏会2023」で木下先生に会場から質問をしたところ、やはりそこは、不自然でない程度に促音で歌うほうがよいとのことだった、（楽譜3）

○「かやの木山の」（北原白秋作詞・山田耕筰作曲）の13～14小節目、「やまがのおばさはいろりばた」の楽譜には *parlando*（話すように）という発想記号がついている。いかに話すように歌うかが肝腎だと思う。「やまがのおばさは」と「いろりばた」の間に *pause* を入れて「やまがのおばさはいろりばた」と歌うと、いかにも話しているように聞こえやすい。

これは、ピアニストで、コレペティもなさる今

は亡き呉恵珠先生から教わったヒントである。

(楽譜4)

○ドイツリート「Der Lindenbaum」(ミュラー作詞・シューベルト作曲)の68小節目の「Stunde」の「de」の音価について。68小節目では八分音符である。似たような音形が38小節目「raushten」と72小節目「rauchen」にある。どちらも四分音符である。60小節目には68小節目と同じ歌詞「Stunde」がある。音形は異なるが60小節目では四分音符である。つまり八分音符は68小節目だけである。この違いを歌い分けるかどうか。これにも作曲家の意図があると思う。その前後の歌詞は同じである。つまり、歌詞は繰り返になっている。日本語訳で言えば「いま私はあの場所から何時間も離れたところにいるが、」それを繰り返す。ということは、2回目は「強調」ではないか。だから、68小節目の「Stunde」は短く強く、突き離すように歌うのがよいのではないか。1回目は静かに歌い、繰り返しの2回目は強めに歌うのがよいと思う。

ただ、シューベルトの自筆譜では四分音符らしい。どうして八分音符になったかの経緯も知りたいところではある。

2023年の「歌の集い in 沖縄」でこの歌を歌った。この八分音符を強調するあまり、その後長めに *pause* をとった。ちょっとやり過ぎだったかもしれない。(楽譜5)

○ベートーヴェン作曲・シラー作詞「第九交響曲の合唱」について。

これまで、多くの指揮者、合唱指揮者のもとで第九の合唱団員として数多く歌ってきた。歌ってきた中でわたしなりに、こうしてほしいというポイントがはっきりしてきた。

言いたいことは、えてして合唱指揮者と本指揮者との解釈の違いによる合唱団員の戸惑いがあるということ。

そこで、合唱団員からのお願いとして次のことを提案したい。

本指揮者と合唱指揮者は合唱団員が練習を始

める前に、是非打ち合わせをしてほしい。

その打ち合わせをしてほしいポイントを私なりに挙げたい。

1. 「r」の発音を巻き舌でやるか、英語風に「エア」で発音するか？

これはどちらでもよいと思う。巻き舌は昔風、「エア」は現代風と思えばよいのでは？たとえば日本の歌でも、「誰か故郷を想はざる」(西條八十作詞・古賀政男作曲)を現代風に歌うと「だれかこきょうを」だが、昔風に「たれかこきょうを」と発音してもレトロな感じがして味わいがある。

「月がとつても青いから」(清水みのる作詞・陸奥明作曲)の歌詞、「ふと行きずりに知り合った」の「知り合った」の部分「しりあった」と歌うか、「しりおうた」と歌うか。これも同じで「しりおうた」のほうがレトロな味がある。

いずれにしても、本指揮者がどれをとるか合唱指揮者はあらかじめ確かめてほしい。

2. 語尾の子音「t」発音のタイミング。拍内に入れるか、次の拍の頭に入れるか？

3. 596小節以後の「Seid umshlungen, Millionen!」(男声から始まる *Andante maestoso*)の二分音符のスタッカートはどう歌うか？ 半分の四分音符の分で歌うか、スタッカートを無視して歌うか？ あるいは、半分とまで言わないが、レガートではなく1音1音を切って歌うか？ わたしは3番目のほうがよいと思う。

ある第九公演のリハーサルの時、本指揮者に、ここのスタッカートの部分をどう歌えばいいですか？ と質問したところ、「どこにスタッカートがあるの？」とおっしゃった方もおられた。わたしの質問は無視してスタッカート関係なしに歌わせていた。もしかしてオーケストラスコアにはスタッカートが付いてないのだろうか？

(楽譜6)

4. 916小節から919小節までの4分の3拍子の *Maestoso*、三つ振りで振るか、六つ振りで振るか？

(楽譜7)

第九演奏にあたって、以上の最低4点は、本指揮者と合唱指揮者で事前に打ち合わせを是非してほしい。

以上、生意気にコレペティ気取りで、わたしがこれまで気づいた歌い方のヒントを述べた。いろいろ異見もあると思う。ご教示をいただければ幸いです。

(楽譜 1) 越谷達之助 作曲
石川啄木 作詞

初恋

(a)

すな や まの すな に すな

(b)

すな や まの すな に すな

(c)

すな や まの すな に すな

(楽譜 2)

この道

北原白秋 作詞
山田耕筰 作曲

緩く静かに ♩ = 56

p *f* *p*

このみ

(楽譜 3)

さびしいカシの木

やなせたかし 作詞
木下牧子 作曲

19

mf *poco rit.* *a tempo*
mp

くもはながれて きえてしまつた

(楽譜 4)

かやの木山の

北原白秋 作詞
山田耕筰 作曲

13

pp *parlando* *cantando ancora* *p* *mf*

やまがのおぼさは いろりばた そだ た きー しぼー た き

■ 歌の原点を想って ～琉大ミュージカルとパフォ

花燈 明佳 かとう さやか

こんにちは。花燈明佳と書いて、かとうさやかと申します。琉球大学教育学部音楽教育専修を卒業し、声楽を学びながらミュージカルや舞台演劇への出演を行う他、ナレーターとしてCM・テレビ番組のナレーションやキャラクターボイス、また司会業など声の活動をしております。今でこそ人前に立つお仕事をさせていただいておりますが、元々は人前が苦手でした。今日は、そんな私がどうしてミュージカルに関わるようになったのか、また、沖縄のミュージカル事情について少しお話できればと思います。

○琉大ミュージカル

私のミュージカルとの出会いは大学時代でした。私の母校である琉球大学には、学生自らがキャスト・オケ・制作・スタッフとなって舞台制作の全ての工程を担い、その成果発表として1000人規模のホール公演を行う「琉大ミュージカル」と呼ばれる授業があります。琉球大学の教授を務めていらっしゃった、本協会の理事・ミュージカル部門長でもある服部洋一先生の元で始めました。授業では、ミュージカルの制作を通して学生間の協調性を養い、台本・役柄の解釈や発音法などの語学能力的分野や、発声法・歌唱法・伴奏法などの音楽的分野、演技・舞踏などの身体表現法分野、音響、照明、メイクアップ、小道具・大道具作成、ビデオ及び記録作成などの美術的分野を総合的に学びます。もちろんほとんどの生徒が舞台制作へ初めてチャレンジするため、たくさんの困難に直面します。ですがそれこそが「琉大ミュージカル」の醍醐味でもあります。自身のスキルを磨きながらも、ひとりひとりが舞台全体を支えているという自覚と責任を持ち、試行錯誤しながらコミュニケーションを重ねることで得られる達成感と自己肯定感は、学生たちのその後の生き方に大きな影響をもたらしてくれます。

琉球大学へ入学した当時、私の実技専攻はリ

コーダーでした。ミュージカルに興味はあったものの、人前で歌ったこともなければ演技をしたこともなく、オーディションを受けることすら恥ずかしかった私は、1年目は裏方の衣装班として参加しました。舞台袖からキャストの練習を覗き見では憧れる日々。ちょっぴり…いや、とても羨ましく悔しくもありました。

その後、在学中に結婚し出産。大学を1年間休学しました。そして復学し「出産を乗り越えたんだし、きっとオーディションもなんとかなるさ！」と謎の自信と共に、改めて琉大ミュージカルを受講。ありがたいことにソロ曲をいただき、私にとってはこのミュージカルの舞台が大勢の人前で歌う初めての経験となりました。歌う喜びと、役に共鳴する心の震えに涙が止まらなくなるほど感動したことは、今でもはっきりと覚えています。

○パフォ部・スタジオパフォ

大学を卒業した学生たちは、それぞれの将来へ向かって別々の道へと進んでいきます。そんな中、どうしても表現活動への想いを消すことができなかった卒業生の有志が集まり結成したのが「創作ミュージカル団体 パフォ部」でした。その名の通り、オリジナルのミュージカル作品を上演する団体で、県庁職員に教員、生命保険会社員、養豚業、塾講師など日中はそれぞれ仕事をしながら、夜や休日に集まってはリハーサルを重ねていました。当時息子がまだ小さかった私は、夜息子が寝付いてから、起こさないようにこっそり家を抜け出して参加していました。働きながら、子供を育てながらと、今振り返ればハードな毎日だったと思いますが、当時は歌って踊れる環境が嬉しくて全く苦になりませんでした。衣装を着て舞台メイクを施した私を見て「これはママじゃない」と息子に人見知りをされたこともありました。今では我が家の笑い話です。

パフォ部には 趣味ではなく本職として活動していきたいとプロを目指すメンバーも多く、ここでの活動がきっかけで今では県内外で活躍するダンサーや、映像制作のクリエイター、秋田のミュージカル劇団「わらび座」へ入団し活躍してい

るメンバーもいます。その中でも沖縄のミュージカルに大きな発展をもたらしたのが、パフォ部の発起人でもある西平士朗氏です。

西平氏は「沖縄にブロードウェイをつくりたい！」と、ミュージカルの聖地ブロードウェイのように沖縄にミュージカルを根付かせるという目標を掲げニューヨークへ留学しました。そして帰国後、本格的にミュージカルが学べるレッスンスタジオ「スタジオパフォ」を立ち上げました。現在はレッスンだけではなく、より本格的なミュージカル作品の制作を行い、劇場公演だけでなく、学校公演やイベントステージなども行っています。スタジオの卒業生には、県外やニューヨークへと更なる学びを進めていった方や、東京を中心に数多くのミュージカル作品へ出演するなど活躍している方もいます。ディズニーアニメ『モアナと伝説の海』でデビューし、現在はミュージカル俳優としても大活躍中の屋比久知奈さんも、琉大ミュージカル、そしてスタジオパフォ卒業生の一人です。

○琉球芸能実演家 玉城匠さんの話

沖縄とミュージカル、なかなかイメージが結びつかない方もいらっしゃるかと思いますが、沖縄にはオペラやミュージカルのような要素を持つ伝統芸能があることをご存知でしょうか？それは、組踊りです。先日、琉球芸能実演家として県内外で伝統芸能にとどまらず様々な舞台上で活躍している玉城匠さんにお話を伺う機会がありました。

組踊りは、派手な動きを行うことはあまりありません。顔をちょっと下に向けたり、視線を落としたりすることで悲しさを表現するなど、繊細な動きの中で芝居をしているのだそうです。そのため音楽によって役の心情や細かな情景などを表現する場合も多く、音楽はとても大きな役割を担っている大切な要素なのだを教えていただきました。踊りに音楽にドラマチックなシナリオにと、聞けば聞くほどオペラやミュージカルとの共通点の多さに驚きました。近年では「シンデレラ」や「カチカチ山」「スイミー」などの海外作品や童

話とのコラボレーション作品、子ども達向けの作品など様々なアレンジやコラボレーションされた組踊りが上演され好評を得ているのだそうです。今年は、沖縄のご当地ヒーロー「マブヤー」を組踊り作品として上演予定なのだそうです。。いつかミュージカルと組踊りのコラボレーションも夢ではないかもしれません！

○歌い手と健康についての実感

また、玉城氏が沖縄県立芸術大学の学生だった頃、学校の授業とは別に国立劇場が主催する組踊りの研修プログラムに参加していたのだそうで、そこでは立ち方としての舞台上稽古だけでなく、体育の授業もあり、時にはみんなでプールへ出向き水泳の授業も行ったのだそうです。一見、組踊りとは関係のないように思われるかもしれませんが、日本中、時には世界で様々な公演を行う上で、そうした体づくり・体力強化をしていたことが非常に役立っていると語っておられました。

体を鍛え健やかに維持することは表現者にとって非常に大切な要素であるのはもちろんですが、喜びであるとも感じます。というのも、私は昨年「卵巣嚢腫」という卵巣に腫瘍のできる病気を患い、摘出手術を受けました。病気が発覚してからというもの、心は不安でいっぱい呼吸は浅く、手術を受けるまで捻転や破裂を防ぐため思うように運動もできない日々が続きました。大好きな歌で元気を出そうと歌ってみても、体に力が入らず思うように声が出ないことでますます気が滅入ってしまい、楽譜を見るのも辛かったです。現在は病理検査も終え、良性腫瘍との診断もいただき、無事に回復しています。術後初めて歌った時は、深く息が吸えること、歌う前のストレッチを安心して思いっきりできることだけで涙が出るほど嬉しかったです。歌えることは当たり前じゃない、歌える身体があることは当たり前じゃないのだと、喜びいっぱい幸せいっばいに声を出すことができました。

これまでの研修会や例会で先生方もお話しされていましたが、「歌い手にとって身体が楽器であり、良い歌のためには良い身体を維持してい

なければならない」ということを身をもって学ぶ機会になったと前向きに捉え、健康についてもっと真剣に向き合っていきたいと思っています。

最後に、本協会の理念として豊田先生も以前の会報でもあげていらっしやった「音楽は幸せを運んでくる」という言葉が大好きです。これまで、私の元へ音楽がたくさん幸せを運んできてくれました。私もそんな音楽を奏でられる人でありたいと思います。

徒然なるままに書き進めてしまいましたが、この度は会報への掲載をさせていただき誠にありがとうございました。

スタジオパフォ ミュージカル LIVE from OKINAWA の公演舞台風景 左端白いドレスが筆者（花燈明佳）



■中田喜直(1923-2023)生誕 100 年コンサートを終えて

仲村渠 悠子 なかんだかり ゆうこ

去る 2023 年 12 月 27 日、那覇文化芸術劇場なは一と小スタジオにて、友利あつ子氏、糸数知氏と私・仲村渠の三人で「中田喜直生誕 100 年コンサート」を開かせて頂きました。友利氏の呼びかけではじまったこの企画ですが、久しぶりの東京訪問で「中田喜直作品を後世に残すためご尽力なさっている中田幸子夫人を訪ねてみてはどうか」と恩師に言われた矢先だったので、友利氏からお声掛けいただいた時は運命のように感じてしまいました。早速、恩師の大坪サイ先生に電話し、幸子夫人に連絡をとっていただきレッスンしていただけることになりました。(恩師の大坪先生と中田幸子夫人は学生時代からのご友人) 作曲家を身近に知る奥様からお話が聞けることは作品を理解する上で非常に助けになります。貴重な機会をいただき大変嬉しく、12 月の初旬に、私と友利氏は沖縄から移動し、東京在住の糸数氏と東京で落ち合い幸子夫人を訪ねることにしました。

去年は中田喜直生誕 100 年ということで全国各地で中田喜直作品が演奏されたり、催しものが企画されていました。5 月には毎年命日月に開催される『水芭蕉コンサート』も紀尾井ホールにて開催されましたし、上野の旧東京音楽学校奏楽堂では「畑中良輔と中田喜直～ブルちゃんとチャンちゃん～」の企画展が特別事業として行われていました。上京の際、上野の企画展を見に行くことが出来たのですが、書簡、日記、自筆譜など作曲家の素顔を垣間見ることができ、戦時中に書かれた遺書や友人を思って書かれた手紙などは、涙なしでは見られないほど心打たれるものでした。

なかでもピアニストへの道を諦め、作曲家に転向する時にしたためた 5 か条は印象的でした。中田喜直先生ご自身が 20 代前半、ご自分との約束のような形で書かれたメモ書きのようなものでしたが、几帳面な性格が伺える小さくしっかりした字で『ショパンのバラードやスケルツォを弾く

ことを諦めること』『手が大きくないと弾けないような大曲を弾こうとしないこと』『二流のピアニストではなく一流の作曲家に』等々、手が小さい事のハンディを克服するよりも、そのための時間を作曲にあて良い曲を書いていくというような内容でした。

後に中田先生はピアニストが小さい頃から大人用のピアノを使うことに疑問を持ち、オクターブの幅を 1 センチ詰めたピアノを制作してもらい細幅鍵盤の普及に務めたりもしましたが、これはあまりうまくいかなかったようです。ちなみに私の恩師の家には細幅鍵盤のピアノもあり、弾かせていただいていたのですが、手を広げすぎるあまり筋肉のゆるみがなくなり動きが鈍くなる箇所などは、俄然楽に弾けます。どうも音響の方に問題があったようです。普及に至らず残念ですが、もし中田先生が大きな手で著名なピアニストになっていたらこのような名曲の数々はうまれなかったでしょうから、それはそれで幸運だったのかもかもしれません。

ピアニストの視点から、しかもショパンが大好きな私としては(中田先生も大のショパン好き)『ショパンのバラードやスケルツォを弾くことを諦めること』という一文は心痛いものでした。幸子夫人によると同学年に田村宏先生がいらしたので、いつも一番は田村宏先生、二番は中田先生だったそうです。(田村宏先生といえばピアノ界の大御所。教鞭をとられてからは芸大で最も怖い先生としても有名で、多くの優秀なピアニストを排出し戦後音楽界をリードしました。)

時間には限りがあり、この人生でできることを全うしようとする姿勢は、戦時中身近な人との悲しい別れを体験してきたせいかもしれません。徴兵から逃れられず、それならばせめて大空に羽ばたく飛行機乗りになりたいと自ら陸軍の操縦見習い士官の試験を受けたそうですが、特攻隊に任命された時の心情を思うと胸がつまります。幸い数々の幸運に恵まれ、終戦を迎えることができたわけですが、戦地をくぐりぬけてきた体験という

ものは私たちには到底想像しえないものである
うと思います。

入隊時に持参したといわれる一冊の楽譜、それは日本の童謡集でした。「柔らかく美しい日本語で歌われる童謡を聞いて育つ子に悪い子はいない」という信念をお持ちだったと、幸子夫人から聞きました。音楽で平和を訴える。中田先生らしい柔らかで優しいやり方だなあとと思います。もしくはそんなことは考えず、純粹に音楽の美しさを届け、それを聞く子供たちに幸せになってほしいと願っただけかもしれません。お父様の中田章（早春賦作曲）さんに続き、名曲の数々を残した中田先生の作品が日本中、世界中に響き渡り人々に平和の風を送り込んでくれたらどんなにかすばらしいでしょう。中田幸子夫人から、それぞれの曲について細かくご指導賜り、作品ができるまでの意外なエピソードや目から鱗の解釈など、沢山学ばせていただきました。

童謡の他に歌曲、ピアノソロ曲などまだまだ知らない曲がたくさんあります。3000曲近くあると言われる中田喜直作品、今後とも勉強し作品の真髄に近づけるよう精進して参りたいと思います。

中田喜直略歴（友利あつ子作成）

1923年8月1日東京府豊多摩郡(現東京都渋谷区)
に作曲家の父中田章の三男として誕生
1933年小学校4年生 歌曲「静かな日」を作曲
1935年小学校6年生 童謡「怪我」を作曲
1936年東京音楽学校(現・東京藝術大学)本科器楽科(ピアノ専攻)入学
1943年同校卒業
1946年ピアニスト志望であったが手が小さいことから断念し「新声会」に入会し歌曲の伴奏を務めるかたわら作曲家として活動を本格的に開始
1951年「かわいいかくれんぼ」を作曲。サトウハチローとコンビを組んで童謡の作曲を開始
「雪の降る街を」が全国的にヒット
1962年「ちいさい秋みつけた」レコード大賞童謡賞受賞
1975年 第5回日本童謡賞受賞(「こどものうた100曲選集」キングレコードLPステレオアルバム集)
1979年 社団法人 日本童謡協会 会長に就任
1986年 紫綬褒章受賞
1995年 第46回NHK放送文化賞受賞
1999年 日本音楽著作権協会60周年特別賞受賞
2000年 第42回日本レコード大賞日本作曲家協会功労賞受賞。5月3日 逝去 73歳没

中田幸子氏を囲んでのピアノ合わせ風景:左より糸数知氏,
中田幸子氏(中田喜直夫人),友利あつ子氏,筆者



■歌う思い出 I 恩師たちとの出会い ～スペインからフランス～

福田美樹子 ふくだ みきこ

カルメン・ブスタマンテ先生の教え

わたしは大学時代、「どちらかと言うと、リリックの曲が向いているのでは？」と先生に言われ、短調で心情を表現し歌うアリアを好んで勉強していました。その頃、心惹かれた歌曲はグラナードスや、トゥリーナ、ファリャなどでした。

大学卒業後はスペイン、バルセローナへ渡り、運良くリセオ音楽院のカルメン・ブスタマンテ先生のクラスに入ることができました。リセオ劇場の最上階にあったコンセルバトリーオでブスタマンテ先生の声楽レッスン、アンサンブルレッスン、ディクシオンのクラス、そして演劇やオペラのクラスにも出席し、毎日本当にたくさんの勉強をさせていただきました。

ブスタマンテ先生は、モンポウとも交流があり、カルメン・ブラーボ先生とのアルバムも多数リリースされ、スペイン歌曲におけるソプラノ歌手の第一人者で、まだ現役で活動されていたので、舞台での経験を惜しみなく生徒たちに教えてくれました。

グラナードスのカタルーニャ語の歌曲に出会ったのも先生のクラスでした。モンポウ、トゥリーナ、ロドリーゴ、ファリャなどの作品をレッスンしている時、セビリア出身のブスタマンテ先生が、スペインの独特な節回しを、ご自身の歌を通して教えてくださり、この体験は、今でもわたしの中に生きています。

先生は、いつも外国人の私を気にかけてくれました。先生の娘さんがソプラノでわたしのクラスメートだったこともあり、自宅にご招待いただくなど、家族ぐるみでサポートしてくださいました。

また、「歌手は楽器としての身体に本当に向き合わなければならない」という信念をお持ちで、舞台人のためのワークショップにご一緒し、身体全体へエネルギーを通して声を出していく手法に出会ったことはわたしの財産となりました。

(その後わたしは毎週、そのワークショップに通うことになりました。そして何年か後に先生が来日してコンサートに出演された時に、お供した楽屋でもそのワークで身体をほぐしてらっしゃいました！)

先生のクラスでは『丹田』『腹横筋』『横隔膜』などの正しい使い方、『息の流し方』『息を妨げない舌の使い方』などを、いくつもの発声練習のパッセージを実践しながら繰り返し教えて下さいました。

半年ほど経った頃、重かった私の声は、どんどん高音が出るようになり、ドニゼッティのオペラのコロラトゥーラのアリアを与えられるようになり、レパートリーが少しずつ変化して、フランスのコロラトゥーラのアリアも勉強するようになりました。

マディ・メスプレ先生との出会い

スペイン留学から一年後、フランスで勉強したいという気持ちが高まり、リセウ音楽院に席を残したままフランスに渡り、ボルドーのコンセルヴァトワールの門を叩き、バリトン歌手のジャン＝クリストフ・ブノワ先生と、イレーネ・ジャルスキー先生のクラスで一から勉強することになります。

スペイン出身の友人に助けられながら、全く異なる発音のフランス語に奮闘しました。そして二年目に、引退直後のマディ・メスプレ先生が、ボルドーのコンセルヴァトワールの教授として、パリから毎週教えに来られるということになったのです。まさしく、運命の出会いでした。日本に一時帰国していたため、生徒募集も締め切られていましたが、伴奏ピアニストの先生がわたしの声とメスプレ先生の声が似ていると感じてくださり、オーディションの時間を交渉してくださったことで、メスプレ先生に声を聞いていただく機会を得ました。ドビュッシーの《ピエロ》を二度歌い、すでに満員となっていたクラスに特別に入ることができました。

メスプレ先生のレッスン

クラスで唯一のコロラトゥーラソプラノだったわたしのために、ご自分のレパートリーの中から毎週 2~3 曲の楽譜をご紹介してくださり、それを 1 週間で勉強して、次の週にその曲のレッスンを受けるという日々がスタートしました。

スタンダードなオペラ・アリア、フランス歌曲に加え、マッセ、メサジェ、ルコックなどのオペレッタや、あまり馴染みのないベイツ、ドビュッシーの初期のコロラトゥーラのための歌曲もたくさん稽古していきました。

当初のわたしはフランス語を始めたばかりだったので、譜読みにほとんどの時間を費やし、毎日サント=カトリーヌ通りの屋根裏のアパートの中庭の壁に向かって練習していました。メサジェ作曲オペレッタ「お菊さん」のアリアをアパートの壁に向かって歌っていた時、古い石畳の壁に当たる夕日の輝きを見ながら故郷を思い、ノスタルジックな気持ちになったことは昨日のこのように感じます。

オペラでは、先生の当たり役である「ラクメ」を細かく隅々まで稽古してくださり、レッスンの時間が少しでも余ると 3 分でも「ラクメ」の中のコロラトゥーラのパッセージを稽古してくれました。

コロラトゥーラのレパートリーの勉強を通して、メスプレ先生の発声法を学びました。先生の教えてらっしゃるパリ市立音楽院にも毎週通い 4 年間でメスプレ先生のレパートリーのほぼ全てを伝授していただきました。わたしのファースト CD アルバム「歌う思い出」の曲目は全て先生からいただいた曲になりました。その際、先生からのわたしへの花向けの言葉をアルバムに掲載させていただきました(写真 2)。出来の良い生徒とは言えないわたしでしたが、このアルバムをリリースできて、少し恩返しができるように思います。発売記念リサイタルの前には、トゥールーズのご自宅に伺い、改めてレッスンをしていただきました。それが、メスプレ先生との最期の時となりました。

メスプレ先生に学んだ声楽家としての心構え

コンセルヴァトワールでのメスプレ先生はとても厳しい方で、最初は泣きそうになりながら必死でついていきました。テクニックだけではなく「声楽家には柔軟な心と柔軟な身体が同時に必要で、心が動いたらそれを全て歌にするためにも、感情の浮き沈みを感じることは何一つ無駄ではない」など、演奏家としての大切な心構えをよく話してくださいました。

まず先生がわたしに与えた歌曲はラヴェルの《5つのギリシャ民謡》でした。フランスのエスプリが全て詰まっていて、フランスのリズムや様式も全て入っているとのことでした。この曲が、わたしのフランス歌曲への道のスタートとなりました。フランスのオペラや、歌曲を初めて演奏しようと思うと、戸惑う人が多いと思いますが、当初のわたしもコロラトゥーラの発声法はほとんど身についていくのに反して、フランス語で歌うことはなかなかものにならず、本当に難しいと感じていました。これから始める方の為にフランス語を歌うためのポイントを少しお伝えします。

フランス語を歌うためのポイント その1「フランス語と母音」

フランス語は4つの鼻母音を含めて15(16)の母音があります。これだけたくさんのフランス語の母音を歌い分け、フレーズの美しい曲線を母音の変化によって崩す事なく歌うため、唇、舌、顔の筋肉を細かく使う必要があります。そのため、顔の筋肉、上唇周りの筋肉、下唇の関係で、それぞれの母音の口の形をパターン化して覚えていくことを教えて頂きました。

例えば *cœur*、*seul* などの *œ* の発音は、上唇は前に突き出した形で、なおかつ、横に保ったまま、下唇は縦に長方形のような形に保ちます。

また、*doux* など *ou* の発音は、口の形を決めたら、他の母音より深く発声することで実現します。日本語のようにウという浅い発音をしてしまうと *deux* に聞こえてしまって、意味が「優しい」から「二つ」となり、別の意味になってしまう悩ま

しい母音です。よくフランスでは、「フランス語で道を尋ねるとわからない振りをされる」などと言われますが、似たような発音で意味が正反対になる単語があり、道を聞かれた相手も理解できていない場合が多いのです。

i の母音はかなり響きを上に感じます。小鼻の横を膨らまし、鼻の頭からVの字を作るように発声します。エの狭い母音もこちらのイメージです。また、鼻母音は他の母音より音を長く保つことが難しいので、より一層横隔膜を引き下げ維持する必要があります。

フランス語を歌うためのポイント その2「ベルカントの体幹」

上記を実践する上でも、やはり基本のベルカントの体幹を保つことが、フランス語歌唱にはより一層大切だと実感しています。音域の高い曲ではフランス語の発音は更に難易度が高くなり、ますます体幹が大切になります。

先生は、よく en などの鼻母音を使ってコロラトゥーラの高音のパッセージを稽古してくださいましたが、レッスンの後は本当にヘトヘトになりました。

(②につづく)

写真2 アルバム「歌う思い出」ブックレットより
マディ・メスプレ先生からの著者への言葉



“声の色調が美しい”

Mady Mesple
マディ・メスプレ (仏オペラ歌手)



写真1 ボルドー音楽院にて 筆者 (福田美樹子)

■ 最近感じていること

中川 麗子 なかがわ れいこ

初めて会報に投稿させていただきます、東京で声楽を学んでいる中川麗子と申します。今年度から本協会に入会し、郵便等で活動の様子を楽しく拝見させていただいております。このような機会を与えていただき、ありがとうございます。私自身、沖縄へは一度も訪ねたことがないので、いつか協会の活動を通して伺えたらと思っているところです。

私は昨年まで、東京音楽大学の博士後期課程に在籍しており、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトのオペラ作品を中心に研究を行っていましたが、今回は挨拶がてら、研究のことは一先ず置いといて、最近私自身感じている事を書き綴ってみようと思います。

私が東京に出てきたのは18歳の頃で、大学進学がきっかけでした。学部は国立音楽大学(以下、国音)でしたので、西東京のはずれにある、とてもどかで、開放感があり、四季の移ろいを肌で感じることでできる自由な雰囲気でした。私は、学校のすぐそばの音大生が住む音だし物件(いわゆるお互い様物件)に住んでおり、学校の周りには音大生用アパートが多かったため、私と似たような上京したての同級生が周りにうじゃうじゃ住んでいました。そして大体、家が近所の子同士でつるむようになり、友人同士で朝から晩までほぼ一緒に生活をしてきたせいか、4年間あまり寂しい思いをせず、それなりに充実した楽しい学生生活を送っていました。大学院からは、当時の先生の勧めもあり、東京音楽大学のオペラ科へ進学しました。東京音楽大学は池袋(今は中目黒にもあり)にキャンパスがあり、国音とは打って違ってザ・都会という印象でした。この進学をきっかけに、西東京のはずれから都内に引っ越し、それまで自転車登校だったのを電車登校に切り替え、何もかも新しい環境へと移り変わりました。学校生活もかなりハードだったため、一日歌のことについて考えている日々でしたが、好きなこと

が出来る喜びと、それを支えてくれる先生方に恵まれて、非常に充実した日々の連続でした。好きなことを続けるため、考え抜いた末に、博士課程に進学することを決め、昨年3月まで、モーツァルトのオペラについて研究を進めてきましたが、博士課程の授業では、音楽にまつわることはもちろんのこと、音楽以外にも新しい知見や経験を積むことができました。自分の未熟さと常に向き合う、この世界で生きていくと苦しいことの方が多様な気がします。たまに一つでも微かな光が見えた時、嬉しさや喜びが倍以上になってかえってくることもあり、それがやめられない中毒となる一つの原因かなと感じています。

中毒性と言えば、最近月に一度通っているイタリア料理店もそうなのです。東京へ上京して10年目を迎える今年ですが、初めて一人で通えるお店を見つけることができたのが、最近のちょっとした喜びです。そのイタリアンは家のわりと近くにあるのですが、決まったルートしか通らない私には見つけづらい、表通りにある角を曲がらなければいけないので、今まで全く知らなかったのです。普段は家でご飯を食べることが多いので、たまには外でおいしいものが食べたいと思い、お得意のスマホで探していたところ、こじんまりとした雰囲気でお料理も繊細な感じで美味しそうだったので、少し緊張しながらも電話してみることに。「はい、～です。」と女性の方の対応で、電話越しの声がとても優しく、安心できたので、そのイタリア料理店にうかがってみることにしました。お店に着くと、奥にカウンターが5、6席ほど、玄関入ってすぐのところテーブルが2席あり、少し薄暗いけれど、温かみのある照明が落ち着きを与えてくれる空間でした。旦那様がシェフ、奥様がホールの役割で、飲み物、前菜、パスタをオーダーし、早い時間だったからか私一人だったため、テンポよく料理が出てきました。シェフが目の前で料理を振舞ってくれるため、少し緊張しながらも、最初に出てきた前菜のホタテのカルパッチョからいただくと、トマトソースとの相性が抜群でぺろりと平らげてしまい、続くキノコのパ

スタも、風味がクリームソースと抜群に合い、これもまた夢中で平らげてしまいました。その間に、奥様が、なぜうちを知ったのか？、この付近で入りやすいお店の話等々、色々な話をしましたが、なんせ居心地が良いので、外食に行ってもその店の人と話すなんてことをしたことのない私が、ぺらぺらと喋りだしてしまうくらいなのだから、自分でも驚いたくらいでした。最後はチーズケーキをいただき、お腹はもちろん、心まで満たされ、大満足で帰宅したのを機に、一ヵ月に一度、エネルギーチャージも含め、通っています。

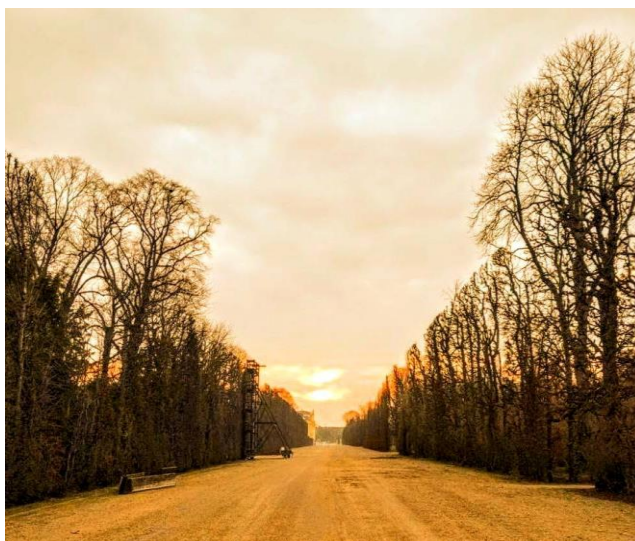
その店に行くようになってから、私自身も表現者の一人として、一口目で美味しい!と感じたあの時のように、一小節目で虜になる歌手を目指したいと思うようになりました。そして、モーツァルトの名言に「高尚な知性や想像力、またはその両方があっても天才に至りはしない。愛、愛、愛。」とあるように、何事にも愛情をもって接することのできる人になりたいと感じています。

ウィーンはモーツァルトゆかりの地。ウィーンでの写真を掲載させていただきます。全て筆者が撮影しました。

写真① ウィーン、シェーンブルン宮殿のグロリエツテ



写真② ウィーン シェーンブルン宮殿庭園



写真③ ウィーン市内シュテファン寺院近辺にて



■ 2つの音楽体験

① 作曲の動機；

ヴィーナスの冷静なまなざし

② 声楽家の発声調整アリア

豊田喜代美 とよだ きよみ

① 作曲の動機：ヴィーナスの冷静なまなざし

オーケストラと声楽との作品が日本においては多くない中で、江村哲二氏（1960-2007）作曲の《プリマヴェーラ（春）》を演奏させていただいたことを、心から幸いに思っています。

それは1996年サントリーホールで小松一彦指揮、新日本フィルハーモニーとの演奏でありました。発売されているCD（江村哲二作品集地平線のクオリア）を改めて聴いて、江村哲二氏とお話しさせていただいたホールでのリハーサルのことを思い出していました。

オーケストラとの合わせで、何か不思議な感覚にだけとらわれていて心もとなかったので、ご意見をうかがいました。「そのまま歌ってください。」とのお言葉に、オーケストラの響きを感じるままに歌っていきました。歌いながら、オーケストラの艶やかさに圧倒されながら何とも不思議な感覚を覚えていました。

曲名の《プリマヴェーラ（春）》は、「ボッティチェリの作品に拠っている」と江村哲二氏はCDのプログラム・ノートに記しておられます。そして、更にプログラム・ノートに江村氏が記した「何よりもこの絵が私をとらえて離さないのは、むせかえるほどの春の花々の香りの中にありながらきわめて知的で冷静なヴィーナスのまなざしである。」との文章を読んだ時に、この曲の全容、江村氏の表現したいものが、私の中でくっきりとしたように思います。

むせかえるような春の花々の香りの中で冷静なまなざしのヴィーナスは何を思い、何をしているのか、と思ひめぐらしました。そのうちに、この曲の深いメッセージがかすかに聴こえてくるように感じます。

同じボッティチェリの作品「ヴィーナスの誕生」では、髪は結われておらず、表情には「無垢」を感じます。この「プリマヴェーラ（春）」では髪は結われており、江村氏が「知的で冷静なまなざし」と記されたヴィーナスの顔と手の表情を見て、私は、ダ・ヴィンチの「受胎告知」の聖母マリアの顔と手の表情を想起いたしました。ボッティチェリのヴィーナスは、見る人に、さまざまに「美」を感じさせてくれるように思いました。

もっともっと作曲なさっていただきたかったと思うのは私だけではありません。江村哲二さんの早すぎるご逝去を悼みます。

[江村哲司（えむら てつじ）氏の略歴]

1960年生まれ。兵庫県西宮市出身。名古屋工業大学大学院修了。作曲家。作曲は独学。1992年にワルシャワ・フィル守勢第2回ウィトルド・ルトスワフスキ国際作曲コンクール（審査員：ウィトルド・ルトスワフスキ）にてオーケストラのための《インテクステリア第5番》が第1位を受賞し注目を集める。1993年、ヴァイオリン協奏曲第2番《インテクステリア》が東京都施行50周年記念国際作曲コンクール（審査員：丈二・リゲティ）に入選。1994年、武満徹の推挙により第4回芥川作曲賞を受賞。1998年、オーケストラのための《ローレンツの蝶々》が第9回ブザンソン国際作曲コンクール第1位を受賞。2000年、岩城宏之音楽監督オーケストラ・アンサンブル金沢・コンポーザー・イン・レジデンスを務めた。管弦楽を主要作品として、フランス「ノルマンディの10月」音楽祭、メッツ音楽祭、ドイツ・ラジオ SFB 音楽祭、「シュレヤーンの秋」音楽祭、イタリア・アカデミア・ポローニャ音楽祭、ヴェネズエラ・フェスティバル・ア・テンポ、ISCM 国際音楽祭など、海外においても広く演奏・放送がなされている。作品はビョドー社（パリ）、全音楽譜（東京）などから出版されている。※参考：CD《地平線のクオリア》プログラム・ノート ALM RECORDS

サンドロ・ボッティチェッリ(1510 死亡年) ヴィーナスの誕生



サンドロ・ボッティチェッリ(1510 死亡年) プリマヴェーラ (春)



レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519) 受胎告知



② 声楽家の発声調整アリア

声楽家の多くは、曲を歌う直前に発声を整えたり、調子を確認するために歌うアリアや曲を持っているのではないのでしょうか。

ビルギット・ニルソン氏がモーツァルトのオペラ《魔笛》の夜の女王のアリアを発声調整に歌っていたのは知られていると思います。ワーグナーオペラ作品には欠かせない声楽家として重厚な歌唱で人々を魅了していた、その歌声は、モーツァルトの夜の女王のアリアで調整されていた、と聞いています。

共演した日本のメゾ・ソプラノの方は、コンコーネから3曲を続けて歌って「これで発声を整えている」とおっしゃっていました。私の恩師である柴田陸先生『発声論』（音楽芸術、音楽之友社）に、「コンコーネを歌うのは良い発声練習になる。」と記しておられます。

そうした発声調整の用いる曲は歌唱体験の中で自然に歌手に与えられていくように思います。

私の場合は、セヴィリアの理髪師のロジーナのアリア “Una voce poco fa” です。発声時間の制約がある時は、途中の *io sono docele* から歌います。ケルン音楽舞踏大学の入試時にも、ボゼニウス先生と決めたこのアリアを歌いました（F-dur）。試験を聴いた歌曲伴奏の教授に「メゾソプラノか？」と言われたのを覚えています。

演奏本番直前に歌声の調子を知ることができて調整できるアリアや曲が見つかるには、やはり時間が必要だったように思います。それは、公式の演奏会で、崖っぷちに1人立たされたような必死の状況の中で「これ！」という曲が見つかっていくのかもしれないと思います。

楽器である身体の丹田あたりの内部筋肉の運動能力の具合が歌声の響きを決定すると私は考えているので、“Una voce poco fa” のコトラトゥーラは私にとって、特に演奏に向かう直前の準備としての良い発声調整になるだけでなく、ロジーナの明るさによって精神的にも落ち着くことができるように思います。

オペラ《セヴィリアの理髪師》ロジーナ（豊田）とバルトロ斎藤俊夫バリトン。日生劇場



○ 斎藤俊夫 (さいとう としお) 氏のこと

上記、写真のバルトロは故・斎藤俊夫氏です。ご結婚なさったばかりで若くして天に召され、皆に愛されていたので、関係者が皆、とても悲しみました。斎藤氏は居るだけで安心感を与えてくれる親切で穏やかな人柄でした。

高等学校芸術鑑賞会でもセヴィリアの理髪師を公演した際、主催者から見せていただいた感想文で今でも覚えている文章があります。

それは「バルトロが汗を飛び散らかして熱演しているのが最初はおかしくて笑ったが、見ているうちに何か感動した。震えた。」というものでした。

斎藤俊夫氏は東京藝術大学を修了し、将来を囑望されたバスバリトンで、その深く鳴り響く歌声は声楽アンサンブルを支える重要な役割を担っていました。いつも一生懸命でした。普段は落ち着いていて、いざ本番となると燃えたぎる火のように突き進むので、私は牛のイメージを持っていました。同じ舞台を踏むことで、師匠から弟子、先輩から後輩への伝承が体感によって成されていくことは言われていますが、二期会、日生オペラの他に文化庁の移動芸術祭で日本国中をオペラ共演（フィガロの結婚のケルビーノとバルトロ、他）して、知らず知らずのうちに大きな影響を受けていたと思います。

一生懸命であること！のエネルギーの凄さというものを身を持って教えて下さった斎藤俊夫さんに、共演以来ずっと感謝しています。

改めて心よりご冥福をお祈りします。

本文は豊田喜代美公式ホームページに掲載した文章に加筆したものです。 <https://mulierfortisgratia.com/>

執筆者略歴

仲村渠 悠子: 桐朋学園女子高等学校音楽科, 同大学卒業, 同研究科修了, デトモルト音楽大学卒業, ドイツ国家演奏家資格取得, 2009-2015 年 デトモルト音楽大学講師 (コレペティア), 沖縄県立芸術大学非常勤講師, 一般社団法人日本音楽協会南日本支局副委員長, 1992 年度 PTNA ピアノコンペティション全国大会 E 級銅賞 全日空賞・ソニー賞, 第 5 回おきでんシュガーコン

ール新人演奏会優秀賞, 第 13 回彩の国埼玉ピアノコンクール一般の部 1 位・県知事賞, 第 10 回日本国際室内楽コンクール 4 位, ギリシャ レシムノン ザイラー国際ピアノコンクールディプロマ賞

服部 洋一: 博士 (音楽芸術学), 青山学院卒業, 東京藝術大学卒業, 東京音楽大学及び大学院教授, 琉球大学名誉教授・非常勤講師, 東京藝術大学非常勤講師, 東京二期会スペイン音楽研究会特別講師, 台湾 SGI 青年部太平洋合唱団指導者・音楽監督, 台湾鈴木協会オーケストラ指導者・音楽監督, RM コンソーシアム創立者
花燈 明佳: 琉球大学教育学部音楽教育専修卒業, 2009-2014 年「創作ミュージカル団体 パフォ部」所属
糸数 剛: 兵庫教育大学院修士取得 (夏目漱石研究), 38 年間にわたり中学校国語教諭, 教頭, 校長, 那覇市立教育研究所所長を務めた. 著書『ネーミング術語による読みの授業』(東京法令出版). ギターで歌う声楽の会主宰, ギターでうたごえ in ほしぞら 主宰, 越智記念ギターアンサンブル代表, 沖縄男声合唱団団員, ワンボイス団員, 日本声楽発声学会会員

福田 美樹子: 国立音楽大学附属音楽高等学校, 同大学声楽科卒業. バルセロナ・リセウ高等音楽院卒業ディプロマ取得, フランスボルドー音楽院, パリ市立音楽院にて研鑽. 東京二期会, 東京室内歌劇場, 日本フォーレ協会各会員. 稲城市観光大使, 日本ジュニアクラシック音楽コンクール審査員.

中川 麗子: 博士 (音楽/声楽). 京都市立京都堀川音楽高等学校卒業. 国立音楽大学を経て東京音楽大学大学院声楽専攻オペラ研究領域修了. 同大学大学院音楽研究科博士後期課程修了. ローマ・サンタチェチーリア音楽院サマーオペラセミナー修了.

豊田 喜代美: 博士 (知識科学), 桐朋学園大学音楽学部声楽科卒業, 北陸先端科学技術大学院大学博士前期・後期課程修了, ドイツ・ケルン音楽舞踏大学声楽科マスタークラス留学, 教会音楽家ドイツ国家資格 C 取得, 2010-2017 沖縄県立芸術大学・大学院教授, 2018-2021 東京大学教養学部非常勤講師, 日本声楽発声学会, 日本演奏連盟, 東京二期会, 日本グレゴリオ聖歌学会, ウィーンハプスブルク宮廷芸術友好協会, 各会員. 第11回ジローオペラ賞, 第16回サントリー音楽賞, 各賞受賞.

編集後記：豊田喜代美 日本歌唱芸術協会(本部：沖縄) 代表

※ 会報を視覚的にも楽しんでいただけるようにと、今回写真資料を積極的に掲載しております。

1月31日現在、1日の地震以後、報道は、その能登半島地震がトップニュースです。崩壊した家々、ひび割れた道路、土砂崩れ、安否不明な方の搜索の様子など、その凄惨さは映像を見る度に、東日本大震災や阪神大震災の時の悲惨な状況も思い出されて、心が押しつぶされる思いになるのは私だけではないと思います。また能登半島の冬の寒さは、被災した方々を更に心身共に追いつめているのではないかと心配がつのります。

沖縄に避難した方々がいらっしゃると聞いています。沖縄は気温が暖かく青い海と空の美しさだけでなく、芸能・芸術の豊かな土地柄とお人柄が被災者の方々のお心をあたためていると思うと、私自身慰められます。『音楽は幸せを運んでくる』という本協会理念の「種」が沖縄に植えられて3年が過ぎようとしています。沖縄の豊かな自然と人に育まれてすくすくと若芽が伸び、ゆくゆくは大樹に育って幸せの実をつけ、世界中の多くの人にその実を味わってもらえることを願っております。

一刻も早い復旧と復興を、本協会の皆さまと共に、心よりお祈り申し上げたいと思います。

日本歌唱芸術協会(本部：沖縄)発足：2021年1月10日

2024年1月31日現在

◎ 会員数：111名

理事

豊田 喜代美(代表) 声楽家,博士(知識科学)

仲本 博貴(代表) 声楽家

西條 智之 声楽家(事務局長・副代表)

喜友名 朝則 耳鼻咽喉科医師,医学博士

武田 光史 ピアニスト

友利 あつ子 声楽家

仲村渠 悠子 ピアニスト

服部 洋一 声楽家,博士(音楽芸術学)

名誉理事

池辺 晋一郎 作曲家,文化功労者

岡田 光樹 ヴァイオリニスト

工藤 和俊 身体運動科学者(東京大学)

五郎部 俊郎 声楽家

顧問

高 丈二 声楽家

宮城 敏 声楽家,合唱指揮者

相談役

糸数 剛 教育家,歌手

幹事

伊藤 広貴 エンジニア

糸数 知 声楽家

金城 真希 声楽家

金城 理沙子 声楽家

日本歌唱芸術協会(本部：沖縄)

E mail : Jsaa.okinawa@gmail.com

公式ホームページ <https://www.jsaa-okinawa.org/>



定期活動内容

■例会:1年に1回開催

- ・発声の基礎学習(音声生理学 等)
- ・歌唱前の準備 身体トレーニング
- ・公開レッスン:合唱、独唱
- ・声楽家のミニコンサート

■研修演奏会:1年に1回開催

- ・国内外からトップの講師を招聘し、公開レッスン
- ・公開講座・演奏会などの開催

2022年 池辺 晋一郎 (作曲家)

2023年 木下 牧子 (作曲家)

2024年予定 宮本 亜門(演出家) 8月25日(日)パレット市民劇場 12:30 開場 13:00 開演

2025年予定 信長 貴富(作曲家)

■歌の集い in 沖縄 演奏会:1年に1回開催

《目的》

- ・愛好家会員のための演奏会。
- ・プロフェッショナルなホールで自らの歌声の響きを聴き、日頃の勉強の成果を確認し、反省点にも気づく
研修としての演奏会
- ・ゲスト出演の専門家会員のアドバイスを受けることができる

■創立記念・定期演奏会(オペラ、コンサート)

- ・2025年に初回を開催予定
- ・専門家会員のための演奏会
- ・オーケストラ、器楽との声楽作品演奏を推奨
- ・日頃の研鑽の成果を発表する場として活用。リハーサルの一部は会員にのみ公開
- ・定期演奏会の本格的録音を行い、CD化、オンライン公開

■会報の発行:1年に2回の発行(3月号、9月号)

- ・専門家会員の寄稿文の掲載、および愛好家会員の寄稿文を《歌・ことばの集い》枠に掲載

■研究誌『歌唱芸術研究』の発行:1年に1回の発行(査読有り)創刊は2022年5月

- ・歌唱芸術に関する研究論文,等による研究誌

■ 上記、定期活動の他に、理念に則った企画を、適時実施する。

■ 短期計画:法人化

■ 長期計画:『国際 歌唱芸術シンポジウム in 沖縄(仮称)』

◎問合せ先:事務局

jsaa.okinawa@gmail.com

ご入会案内

歌は好きに歌って楽しければそれで良いと思いますが、もっともっと楽しく歌いたいと思った時には、是非、ご一緒に、歌の基本を研修しませんか？人と声を合わせて歌う合唱は、一人ひとりが全体を支えているので、その一人ひとりの研修が美しい声の響きとなって全体に効果をもたらします。…それは本当に楽しい素晴らしい感覚だと思います。毎年の『例会』で歌の基本を研修しますので、ご興味があったら、是非参加してみてください。

入会の申請書は、本協会ホームページよりダウンロードできますし、各定期活動の際の受付にも置いてあります。もしくは、下記、事務局にメールにてご連絡くださいますようお願いいたします。

◎ ホームページ <https://www.jsaa-okinawa.org/>

◎ 申請から入会まで

- ① 申請書は事務局にご提出ください。郵送もしくはメールに添付送信にても可能です。
- ② 理事会で承認が成りましたら、事務局からその旨、ご連絡いたします。
- ③ 入会費(最初のみ):2,000 円、年会費:3,000 円をお振込みいただき、その確認後に、正式に入会が決まり会員となります。

◎事務局:jsaa.okinawa@gmail.com

〒920-0076 沖縄県那覇市与儀 2-19-1 仲村渠悠子事務局長・副代表

◎会費振込口座

ゆうちょ銀行 記号 17030 番号 20664491

なまえ:ニホンカシヨウゲイジュツキョウカイ

